はじめに

人間には、飽くなき欲望がある。今日の環境問題のほとんどはこれに起因する。それはまた「人間いかに生きるべきか（死すべきか）」といった哲学的・倫理学的側面や「人間個々人の集合体である社会はいかにあるべきか」といった社会学的・法律学的側面を含む。学際的考慮（研究）が必要とされる所以である。

では、学際的とは何か？　学際性という英語表現には3種類ある。transdisciplinary、interdisciplinary、multidisciplinary である。transdisciplinary は後者2つを含む概念であり、最も広義における学際性と訳されている。multidisciplinary とは、多くの学問分野から知識や技術を得ることにより、学問を拡大する意味をもつものであるが、その概念には統一原理がない。interdisciplinary とは、諸学問を統一する原理が存在し、新しい学問の領域を再組織し、諸学問の間のギャップを埋めようと志すことを意味する。

interdisciplinary という意味における学際的性質を有するもの、あるいは有しなければならないもののひとつに、ヒューマン・エコロジー（人間生態学）がある。だが、この言葉の解釈は多義にわたる。また、ファジィ（曖昧模糊）でもある。そこで、本書ではこれを次のように定義する。

すなわち、ヒューマン・エコロジーとは、「安全・安心・快適な人間生活圏と生物圏（大気・土壌・森林等のいわゆる自然環境）との関係を、より健全な方向へと導くための世界観を与えるもの」であると。

これの実現のためには、従来の区分けされた学問、例えば、自然科学・社会科学・人文学では対応できない。interdisciplinary、すなわち、学問の再編成・結合・統合が必要である。つまり、形而上学的（哲学・倫理学的）認識とそれを形而下学的（科学的・技術的・社会的・法律学的）に記述すること（それは学際的性質にほかならない）が必要不可欠の条件となる。

本書は、以上のような認識のもと、主に大学生を対象に、研究分野を異にする複数の研究者によって執筆されたものである。

全体の構成は5つの章に分かれている。第1章では、安全・快適のエコロジーと題して、都市と田舎、身近な環境である室内や近隣公園、さらに、「住」と「食」を対象に、人間生活圏と生物圏との関係について言及する。続いて第2章では、風土的視角から、森林を対象とした風景と造景についてその全体像を言及する。第3章では、人間生活圏と生物圏の関係を、より健全な方向へと導くための評価方法について、リスク評価・管理、環境評価手法、環境保全・修復・浄化処理技術について、また、LCA 分析の応用例を説明する。第4章では、社会的側面のひとつである法律学、とくに、行政法、刑法とヒューマン・エコロジーとの関係を提示する。最終章の第5章では、哲学・倫理学の視角から、生命と環境の相互形成的な関係に注目しつつ、ヒューマン・エコロジーの

喚起する問いについて、ラディカル（根本的）な論究が展開される。

読者の方々にとって、安心・安全・快適な人間生活圏と生物圏との関係を考えるための、また、副題にもあるように、人と環境の未来を考えるための一助となれば、本書の目的は達せられる。

本書の出版にあたり、その契機を与えてくださった共立出版の木村邦光氏に厚くお礼を申し上げたい。また、誠意をもってご尽力いただいた同 中川暢子氏のお陰で、本書の校正にも意を尽くすことができた。記して深甚なる謝意を表したい。

2010 年 7 月 30 日

編者　野上 啓一郎